史遊サロン通信

No. 259号
平成29年
7月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@jcom.home.ne.jp
新井宏

政治は、（日本の安部晋三）保守中の最右翼が中道を採り（韓国の文在寅）左翼中の最左翼が中道を採ると上手く行く

前回の『史游サロン』では、会場の予約時間を間違えて一時間早くしてしまい、「もう終了の時間です」とバイト風の若い女性から、厳しく叱られた。いつもパソコンで予約していることなので間違う筈はないと思い、多少頑張ってみたが、なかなか受け容れてもらえない。慌てて手続きを済ませてから、会は続けることができたが、それにしても、業務に忠実な女性であり、ある意味で感服するハップニングであった。

さて今回はどんな話題になるやら。

心積もりとしては、映像を駆使して、歴史や民俗の面で大活躍している長島節五さんから、前に『山上の年越し・出羽三山』と云う貴重なビデオを頂戴しており、その解説をお願いしたらと思っていた。長島さんのビデオは「記録映像」なので「余計な解説」が全くなく、そのままではちょっと、もったいない。それに、日本の歴史上では極めて重要な役割を占めていた「山伏」や「修験道」について、体系だった知識も、なかなか得る機会がない。

そんなことを長島さんに投げかけてみたら、今回の『史游サロン通信』に一文を寄せて下さった。それに沿った話題を期待したい。

それから、政治の世界の動きが急である。間もなく「都議会選挙」や「トランプと文在寅の首脳会談」の結果も判明する。

保守中の最右翼、安部さんが我慢して中道よりの政策運営を心がければ、まだまだ政権を維持できると思うが、第一次安倍内閣の時と同じく、心ゆくままに保守中の最右翼で行くならば、墜落するのが運命である。「都議会選挙」がその流れを決めるであろう。

一方の韓国では、左翼中の最左翼の文在寅が米国の最右翼トランプと首脳会談を行う。大方の予測に反して、文在寅は上手くやるのではないか、と思っている。

その関連で、六月出版された、元駐韓大使の武藤正敏氏の『韓国人に生まれなくて良かった』という「嫌韓書」について、外交官ともあろう者のあまりの「洞察力不足」についても述べたい。

（新井宏）

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の**七月十五日**です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室。時間は午後三時～五時。

なお、九月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の**九月十六日**です。

「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

黒山の松例祭

長島　節五

羽黒山、出羽三山は近畿の大峯山、九州の英彦山と並び評される山伏修験の霊場である。

ここ出羽三山では春夏秋冬四季の峰と云う季節事に行が行われていた。その冬の年越し行事、一二月三十一日から歳明けまで行う「歳夜祭」が行われ作占を行う、此を行うための準備は半年前から始まり、麓の手向の集落を上町下町と二分し、上下で競わせ占うのだ。「上位」「先途」の二名の「松聖」を選出させ大晦日に向かって百日間の精進潔斎物忌を行って験力付けてもらう。行者に選ばれ各人の屋敷内の一部屋に結界を張り夫婦家族とも断絶し別火精進を行っていた。現在は出羽三山神社「寂光寺」の傍の斉館(華蔵院)の施設内で百日間の物忌を今でも行っている。

幕藩体制の崩壊により当時の新宗教であった平田篤胤流の神道を国家宗教にすべく三条実朝薩長の輩等による新政権によって始められた明治五年の神仏分離令廃仏毀釈により、全国の神仏習合の形態を取る大規模な組織は当時の国学者と警察国家権力の力ずくの前には術もなく変容してしまった。

出羽三山では鶴岡県令三島通庸の代理、吉田清英により各区長戸長宛てに神仏分離の布達乙第2号発せられた。神祇省から差し向けられたのは佐賀伊万里県の神道実行教を組織化した国学者西川須賀雄(一八三八～一九〇六)で、当時三〇代後半であった。

現在森本学園の籠池と安倍とで話題に成っている教育勅語その制作者の一人。

出羽三山神社と改名され初代宮司西川により力ずくの廃仏の嵐は吹き荒れ堂宇は破壊され仏像は破壊焼却古物商に売却、石仏は谷に蹴落とされ文書経典は破かれ燃された。これにより貴重な文化財が多数消失され数百年の歳月をかけて醸成されてきた精神文化はネジ曲げられたままになってしまった。

出羽三山関係の民俗研究や著作の戸川安章によると巨大な施設や広大な敷地を管理維持する人手が足らず、僧職者に改宗を求めたが叶わず、そこで一人ずつ寄って集って手足を押さえつけて、無理矢理に口に刺身を押しこみ、「生臭」をしたから僧侶ではないと云って改宗を無理強いした。

現在神職の方々の何代か前の御先祖はこうして改宗してしまった方も少なからずいるはずだ。

羽黒山山頂の寂光寺等で宗教活動をする僧侶は頭を丸め妻帯しない僧侶、清僧修験、麓の手向の集落では宿坊営み東北関東一円を霞場宗教活動の場とし、出羽三山参りの案内などを生業としていた、毛坊主とか御師とか云う妻帯修験者達である。

相模の大山でも参道の両脇には宿泊施設宿が軒を連ねている、宿の名称に何々坊とか何々斉館と表記しているが、斉館と表記していれば神仏分離令に便乗、体制に素早く寄り添い神道に改宗しましたとの宣言でもありこれも処世術だ。

手向の宿坊街の中では表向きは斉館と称しても屋敷の奥の納戸などに十一面観音などを安置する仏間があり密に拝んでいる家も有る。

また仏道を捨てなかった羽黒修験の正善院の山伏達の御練には、沿道沿いの人は手を合わせるものだったが、神社の圧力があり戸口を開けて人から見られないように家の奥で合掌をしていた。最近ではようやくと戸口前に立ち合掌する人も見かけるようになった。

「長いものには巻かれろ」「泣く子も地頭には勝てぬ」、常に上位者の為に忖度をする国日本であるが、こうした民俗行事も予備知識と注意力があれば何かおかしいことに気が付くはずだ。でもしょうがないか日本で生まれてここで生きているのだから。

如行雲流水　合掌

出雲大社再考（一三）

近世最大危機佐太神社紛争（5）

幕府寺社奉行の裁定

村上　邦治

出雲大社と佐太神社の紛争は、藩内における神社間の権利抗争であり、藩主松平綱近の名に懸けても、解決させないことには、幕府対し面目が立たないことであった。家老や藩寺社奉行は、双方の言い分を聞き、何とか鎮めようと幾度も条件を提示、両社に和解を働きかけたのである。

しかし寛文遷宮の本殿建立に際し、資金を全面支援した幕府の異例な肩入れは、大社側を強気にさせた。藩如きからの条件では、応じようとしなかった。あくまでも、大国主命を祀る大社を一番理解しているのは、幕府中枢の寺社奉行である、との信念に揺るぎはなかった。

佐太神社は、条目に定められた京都吉田家に頼り、従来からの秋鹿、島根、楯縫三郡と意宇西半郡の神社管轄権(触下)を主張した。

幕府は大社の言い分の根拠とする、寛文七年五月の霊元天皇綸旨（勅許）「永　宣旨」を詳細にわたり調査した。この中では

「国造は永く其の職を掌るべし」

「社中の進退巨細其の制度に規倣すべし」

とあり、大社の祭祀と大社に於ける一切の支配権を、永久に国造家に付与することが、確認されたのである。

検分はこれを与えた朝廷にまでおよんだ。寛文五年に制定された「神社条目」に対抗するためのもので、吉田家の指図は大社にはおよばず、出雲国造の管轄を認めたものである、とすることが明確になった。

元禄九年七月寺社奉行永井直敬は、両国造家上官二名を江戸表に出頭を命じ、種々尋問した。両国造の年齢その子息の有無や年齢、養子制、舎弟の有無、隠居制などであった。三日後上官二人は「口上書」を提出し、国造相続時の詳細（神魂社における神火神水相続儀式）、嗣子無き場合の相続、両国造親類一族の年齢など、改めて書面に認め提出した。

この頃には吟味の結果を出し、具体的な処分を固めていたものと思われる。幕府が裁断を下すにあたり、大社祭祀を守り続けるため、国造家の継承を確かめたものであろう。

その後も大社は、「出雲国総検校職を、佐太社神主が国造の支配に非ずと称しており、取締り願いたい」との訴状口上書を提出した。さらに「出雲国総検校職の由来」勘文にて、出雲国造神賀詞奏上から始まり、日本書紀、出雲国風土記、先代国事本紀、続日本紀、同後紀、延喜式、などの歴史的証拠に基づき、総検校職の正当性を訴えたのである。

元禄一〇年八月、戸田忠真（常陸）、永井直敬（烏山）、松平重頼（豊後木村）、井上正岑（美濃郡上）寺社奉行四人全員連名で、両国造に対し、「佐太神主諍論裁許」が、書状で告知された。

裁許状の要旨は、論争になった大社が根拠とする「永　宣旨」には、

「出雲一国内総検校免許の文意は無く、大社一社の免許であること」

と断じ、さらに

「藩主の命に背き、幕府に嗷訴した罪科は甚だ重大なり」

と、厳しく戒め、

「これより国造千家直治及び同北島兼孝を召し放ち、今後神事に関与せしめざる」

と、両国造罷免という思いも寄らない、大社の全面敗訴であった。

さらに侮られた松江藩は、幕府より一層厳しい処罰を下したのである。

（この項続く）

書評

元駐韓大使・武藤正敏氏の「嫌韓書？」

『韓国人に生まれなくて良かった』

新井　宏

元駐韓大使の武藤正敏氏が、今年の二月に「韓国人に生まれなくて良かった」という「コラム」をダイヤモンド誌（インターネット版）に載せ、更に今月（六月）同じタイトルの『韓国人に生まれなくて良かった』という『本』を悟空出版から出した。

武藤氏は一九四八年東京で生まれ、横浜国大在学中に外務省試験に合格、初任の事務官時代にソウルで韓国語と韓国文化を学び、通算して十二年間も韓国に勤務し、二〇一〇年から二年間は駐韓大使まで務めた生粋の韓国専門の外交官である。二〇一三年には、韓国政府から修好勲章光化章を受けている。

韓国の中央日報によれば、武藤氏の韓国内での言動を振り返ると、日本人全員が韓国を罵っても最後までこの国をかばう人物がまさに武藤氏だったという。

その元駐韓大使、日本を代表する知韓派の外交官が、「嫌韓書」とも見まがうような刺激的なタイトルを付けた『本』を出したのは、「異例」と云うよりは「非礼」であり、当然のこととして、韓国では物議を醸している。

まず思ったことは、韓国に愛情を注ぐ元外交官が、最近の韓国のあまりの「分からず屋ぶり」にフラストレーションが溜まり、遂に我慢ができず書いたのだろうと……。

それは、今の私の心情に共通するものがあるからである。それにしてもタイトルはせめて「日本人に生まれて良かった」位にすべきであった。

ご承知のように、私も今まで随分、韓国のことを書いてきている。その中には当然「韓国への悪口」と受け取られる内容も数多くあるが、目的は韓国の事情を紹介することなので、かつて「日本もそうだった」と云うような事例を示し共感を求めるようにしている。その一方で、なかなか日本に事例を探せないような事柄があると、韓国の歴史に類例を探し、更に政治経済のような大きな流れについては、世界の歴史に学んで書いている。

それにしても、武藤氏の『本』の韓国における評判は劣悪である。一読して見る必要がありそうなので、さっそくアマゾンに注文した。それと共に、ダイヤモンド誌のインターネット版「コラム」を読む。

「コラム」のサブタイトルを拾うと次の通りである。

なぜ韓国の国民は格差問題に激しく反応するのか
人生を決める大学受験と常軌を逸した教育費
サムスンの就職倍率は七百倍　過酷な就職事情
エリートでないと結婚も難しい過酷な結婚事情
子育てで散財の末　過酷な老後の事情
徴兵制が生んだ男女格差　過酷な男性の実態
超競争社会に対する不満が　日本に飛び火

項目はいずれも韓国の問題点を網羅していて、私もしばしば採り上げた内容ばかりである。各項目の解説も、説明するとすればこんなところであろう。ただし、物足りないのは、新聞記者が記事を要領よくまとめたレベルであり、元韓国大使としての見識が欠ける

ことである。武藤氏自身はこの「コラム」の評判について、後で出した『本』では次のように「自画自賛」してしている。

……(このコラムは)、韓国の主要紙、「朝鮮日報」傘下の『チョソン・ドットコム』で紹介され、これに対する読者のコメントも掲載された。……少々刺激的とも受け取られかねないタイトルにもかかわらず、少なくない韓国人の読者が私の真意を正面から受け止め、理解してくださったことが幸いであった……。「このコラム」を読んだ読者がクリックした「賛成」「反対」の数値だけ見れば、私の考えに好意的なコメントのほうが圧倒的に多かった……。

そうこうしている内にアマゾンから本が届いた。そしてビックリした。著者もタイトルも同じなので、『本』は「コラム」を書き直したものとばかり思っていたが様子が異なる。

まず、『本』のジャケットに次のような刺激的な文章が躍っている。

なぜいま文在寅なのか！

開いた口がふさがらない！

北朝鮮にすり寄り、反日を叫ぶ大統領に日本は強い決意で臨むしかない。

更にジャケットの裏帯にもつぎのような刺激的なコピーを並べ立てている。

私に北朝鮮のことしか語らなかった文在寅

新太陽政策」が北朝鮮危機を増幅させる

怒りにまかせて何も見えなくなる国民性

文在寅は「ありえない韓国」を夢想している

経済オンチの大統領が韓国をドン底に突き落す

あまりに過酷な社会、正論を言えない情治国家

北の核とミサイルの脅威を理解できない指導者

そして次のような目次を掲げる。

序章　文在寅クライシスが日韓を襲う！

第一章　最悪の大統領 文在寅とは何者か

第二章　執拗な「反日の嵐」が吹き荒れる

第三章　国家も国民も孤立していく韓国

第四章　こんな過酷な社会では生きていけない

第五章　宥和がさらなる金正恩の暴挙を招く

ダイヤモンド誌の「コラム」とはあまりにも異なる。『本』の主体をなすキーワード、文在寅、反日、孤立、情治国家などが「コラム」には全く見出せないのである。特に「コラム」には一度も登場しなかった文在寅が『本』では間違いなく「悪の主人公」である。

文字遣いも微妙に異なる。あるいはゴーストライターが別の目的で急遽書いたのではないかと疑りたくなるほどである。

気になったので武藤氏の経歴をもう少し調べてみた。

キャリア官僚であるが、横浜国大出身ということが影響してか、本省での局長経験は無いという。自民党政権下では、駐韓大使になれなかったのに、民主党内閣によって異例の抜てきを受けたとの評判もある。駐韓大使退任後は、釜山にある東西大学校の国際学部特任教授を務めているが、私の良く知らない大学である。

さて、ここからが書きたいことである。

文在寅政権は出帆早々、米韓首脳会談の前から、トランプ大統領から強烈なパンチを食らっている。それは当然である。

まず、安保問題として米中韓間の最大課題である「高高度防衛ミサイル（サード）設置」について、文在寅は既設の「二基の発射台」とは別に四基の発射台が既に韓国内に搬入されていたことに「衝撃を受け」、搬入の経緯について徹底的な調査を命じ、国内法に定める「環境影響評価」を終えるまでは、留保するように国防部長官に指示した。サードが六基の発射台でワンセットになっていることなど当事者にとっては常識のはずなのに、中国向け、あるいは国内向けに「設置を遅らせる」ように指示したのである。

これに対して、米ティラーソン国務長官らから文在寅政権の方針を聞いたトランプ米大統領は「激怒」し、韓国を「恩知らず」と名指しで非難したという。さすがに、文在寅大統領も慌てた。

米韓首脳会談を十日後に控え、何とか友好的な雰囲気を造らなければならない最中に、次々と悪材料が露呈する。マスコミが整理した問題点は次のとおりである。

(1) まずは、高高度防衛ミサイルサード発射台増設の中止問題である。

(2) 次は、文在寅大統領との会談を希望した米議会の要人、例えば、かつて共和党大統領選候補であった知韓派のマケイン上院議員、あるいは国防予算の三分の一を握るダービン米民主党上院院内総務などの要人が次々に大統領府から冷遇を受けたという「噂」である。特にダービンは約千億円のサードの予算を他の場所に回すこともできると不快感を述べたほどである。

(3) 更に決定的なことは、文在寅が重用する安保特別補佐官の文正仁が、米国でのシンポジウムで、米国のみならず国連の方針にも反する提案を次々と行う問題が発生した。

文正仁の発言は、いくら学者としての発言だと弁解しても、当然文在寅の方針の代弁と受けとられ、韓米関係は前例がないほどの異常気流に包まれている。核心は韓国新政権に対する米国の「不信感」である。

こうした中、韓米同盟を政治的に後押ししてきた米議会の韓国を眺める目も冷たくなった。文在寅政権が、中国を意識して米国と距離を置こうとしているためではないのかということだ。

その上、北朝鮮に約一年半拘束され、深刻な容態で釈放された米大学生ワームビア氏の死亡が米国世論を沸騰させている。

米韓首脳会談を六月末に控えて、韓国民でなくとも非常に気になる話であるが、この稿を執筆している現在、どう転ぶか判らない。

いわば、ここまでの展開は、武藤正敏氏が『本』で危惧した通りかも知れない。さすが駐韓大使を務めただけの見識だとも言えようか。しかし、私は武藤正敏氏の見解が深みに欠けていて、簡単には同意し得ない。

ここからが、私が今回、書きたいと思ったことである。この稿を皆さんにお届けする七月初には、米韓首脳会談の結果もある程度判明しているであろうから、それを待ってから、書いた方が無難なのだが、そんなことはしない。

文在寅のことを初めて知ったのは、韓国慶尚大学の招聘教授として赴任して間もなくのことである。大学では日本への留学経験がある若い厳龍洙先生が何かと便宜を図ってくれていた。

ある日、厳先生の奥さんが大学に見えた。厳先生も大きな企業の一族らしいが、奥さんの実家は韓国でも有数な「靴メーカー」の経

営者だと云う。日本で暮らしたこともあるとのことで、たまたま食べ物の話題になり、どんな料理が美味しかったかと聞くと、さらりと「イタリア料理」だと云う。変なことを云うと思ったが、後に彼女がイタリアに長く留学していたことを知った。日本の「イタリア料理」はとても美味しいという意味であった。

その頃、盧武鉉政権のナンバー2とでも云うべき文在寅が親戚だと聞いた。もっとも韓国における親戚の範囲は日本よりも一桁広いので、びっくりするほどのことではないかも知れない。

そんなことがあって韓国の政治家のなかでは文在寅に注目していた。端正な顔立ちで、人権派弁護士出身の理論家、韓国の左翼中の左翼を代表する人物である。

それ以来既に十五年、四年前には朴槿惠と大統領選挙戦を戦い敗れはしたが、今回の選挙では左翼系の候補が乱立する中で、圧倒的な支持を得て当選し、今や歴代大統領中での最高の支持率八十三％を誇っている。浮き沈みの激しい韓国政界で二度も大統領候補になった事だけでも、何らかの持ち味があるに違いない。そこで想像したことは盧武鉉をスマートにした人物なのではないかと。

盧武鉉がどうしようもない大統領だったことはその当時随分書いた。米国に逆らったために、最大級のイラク派兵を強いられたり、在韓米軍に対して韓国軍への戦時作戦統制権の移譲を要求し、折から米軍世界戦略再編中のラムズウエルド国防長官から、二〇一二年までに返せと言うなら二〇〇九年までに返しましょうと、あっさり受け容れられ、韓国の軍関係者の間で大恐慌を引き起こした。しかし、韓国側の事情で延期に延期を重ね、現在では二〇二〇年代半ばの移譲も覚束ない状況である。

そんな盧武鉉ではあったが、米国との自由貿易協定ＦＴＡを推進して韓国経済に大きく寄与した。保守系政権が推進したのでは、絶対に、農産物・畜産物・水産物などの自由化について、左翼的な「後進国部分」の納得を得ることなど不可能であったが、左翼中の左翼である盧武鉉が推進したので、左翼系も沈黙した。

似たようなことが、保守中の保守、日本の安倍政権にも見られる。

韓国の最大課題は、保守や左翼を問わず無条件に安全保障問題である。

なにしろ、ソウルは北朝鮮との境界から五十キロしか離れていないので、事が起これば、通常兵器だけで大被害を被る。朝鮮戦争で双方併せて五百四十万人の犠牲者を出し、沖縄戦の「五人にひとりの犠牲者」と同じ経験を持つ韓国民である。沖縄民の心情に立って、「沖縄の反戦意識」を理解すれば、どんなことがあっても北朝鮮との戦争は阻止しなければならないのが韓国の意識である。

対策は、何と言っても、米軍による抑止力である。だから韓国にとっては常に米国問題が最重要であるが、その米国が、金正恩を除去するため奇襲攻撃を敢行するかも知れない。その恐ろしさは韓国の国民でないと判らないであろう。

その一方で、韓国の出方によっては、米国は韓国から米軍を引き揚げるかも知れない。

一九五〇年の朝鮮戦争が、あまりにも米国のいうことを聞かない李承晩大統領のため、アチソン国務長官が、共産勢力に対する防衛ラインを対馬海峡まで後退させる「アチソンライン」を提示した半年後に始まった教訓を知っている。

だから地政学的には「迷わずに」安全保障を米国に頼るべきなのに、米中の間にあって北朝鮮をも巻き込んで「均衡者の役割」を果たしたいというような「歴史に学ばぬ」方策を考え勝ちである。

その潜在意識は、北朝鮮の核兵器と韓国の経済力を組み合わせ、周辺大国に立ち向かえる強国をつくろうと夢見る人を韓国に生んでいる。だから、金正恩はいずれ自壊すると見て、親米と親中の間を行ったり来たりするのである。

もちろん、米国や中国も重要だが、当然のことであるが、当事者の北朝鮮と「決定的な対立」を避けるのが、いくら勇ましいことを云っていても本能である。

以上のように見ると、韓国にとって最重要なのは、米国との関係、中国との関係、そして北朝鮮との関係である。それに較べると、日本との関係など、一部の経済関係を除けば何もないのに等しい。だから韓国は、安心して「反日」を叫べるのである。

「慰安婦問題」や「竹島問題」がどちらに転ぼうが、双方とも「国内問題」すなわち、政権の支持率に影響するだけで、いわばサッカー試合を楽しんでいるようなものだ。

それを本能的に知っているから、「慰安婦問題」や「竹島問題」で韓国はいつも安心して、「反日」を勇ましく語るのである。

前にも書いたが、日本の外交陣は無能ではない。韓国が「竹島」を実効支配している現在でさえも、日韓の「排他的経済水域」や「漁業協定」の境界線では負けていない。すなわち「竹島」を日本が領有しても、「名は取れるが、実はそれほど取れる」わけではないのである。

韓国では、誰に聞いても「竹島問題」では極めて強硬である。それは、朝鮮半島の長い歴史にあって、自らの力で「領有化」した唯一の事例だからであろう。それもマッカーサー・ラインの廃止と云う「ドサクサ」に紛れて、武力を持たない日本に対して、李承晩大統領が、一方的に設定した軍事境界線に過ぎないのであるが。

繰り返すと、米国との関係、中国との関係、北朝鮮との関係は、「慰安婦問題」のように「それ行けドンドン」と云うわけには行かない。その点では、武藤正敏氏が危惧する文在寅が大きな役割を果たすのではないかと云うのが私の期待である。

これを書いている今日、「六月二十五日」は六十七年前に、朝鮮戦争が勃発した日で、韓国では「六・二五」の数字を棒読みして「ユギオ」という。文在寅の訪米を前にして、韓国の動きが気になり、韓国新聞のインターネット版を見ていたら、そこに、ふたつの小さな記事を見付けた。

ひとつは、文在寅が「朝鮮戦争の国連軍参戦有功者慰労宴」に出席し、「特別な尊敬と感謝の言葉を老兵に捧げる」と話した中で、国連参戦勇士のギリース代表に対して、中国義勇軍の参戦で、北朝鮮に取り残された人々を「興南撤収作戦」によって、三十八度線を越えて救出されたことに対する感謝の辞を述べている。**文在寅の両親はその中にいた。**

「興南撤収作戦」は、軍の撤収さえ思うように進まぬ中で、千人ほどの定員の貨物船に民間人一万四千人を載せて北朝鮮の興南港から巨済島へ撤収した大作戦で、ギネスの記録にも載っている。

この話は、新任の外交部長官、女性の康京和も米軍第二師団をわざわざ訪問して、米韓同盟を血盟関係として述べている。どうやらこのアイディアは康京和によるらしい。

だから文在寅大統領は、首都ワシントンに到着すると直ちに、朝鮮戦争の「長津湖の戦い」で犠牲になった国連軍の兵士の慰霊碑で献花を行う。「長津湖の戦い」は十万余の中共軍が二万の米軍に奇襲をかけた朝鮮戦争で最も激しかった戦闘の一つで、米軍側で一万余、中国側で五万の犠牲者をだしている。その中、文在寅の両親も興南埠頭から逃れて来たのである。

このようなことは米メディアが好んで報道するので米の世論形成に役立つであろう。

もちろん、相手がトランプ大統領なので楽観はしていないが、文在寅は米韓首脳会談を何とか無難に乗り越えるであろう。その点で私の見方は武藤正敏氏と異なるのである。

そもそも、今の韓国の最大の問題は、教員組合や大企業労組、慰安婦問題の挺対協などの横暴を制することができないことである。

現代自動車の平均賃金は、既にトヨタを二割も上回っているのに、業績悪化の今年も一人当たり利潤配分としてプラス二百万円を求めている。三年間で二兆ウォン（二千億円）の赤字を出している中小自動車メーカーの韓国GM労組でさえ、ストを掲げ同じような要求をしている。

日本の安倍内閣が大幅な規制緩和を進めているなかで、韓国の利権団体はますます既得権を守っているため、企業は韓国から逃げ出している。

その対策に朴槿惠は苦しんだが、保守系が強力に推進しようとすると、国民的な反発を受けて支持率だけを落とす結果になってしまった。今回の朴槿惠大統領の弾劾の背景には、帝王的なやり方で、「正論」を通そうとして、国会と対立したことが背景にある。

しかし文在寅の場合は異なるであろう。何しろ、左翼中の左翼であるが、政権担当してからも相変わらず、横暴な労組等のお先棒を担ぐとはとても思えない。横暴な国民運動を抑えるには、そのアジテーターであり元締めでもある文在寅しかいないのである。

最後にふたつの事実を紹介しよう。

ひとつは、北朝鮮が、文在寅に対する批判を開始したのは就任後一ヶ月半である。これは、金大中や盧武鉉の時の三ヶ月後よりもはるかに早い。単に正恩が気短なのかも知れないが、文在寅に期待していた北朝鮮が、早くも文在寅を見切った徴候とも見れる。

もうひとつは、数多くの歴代韓国大統領の中で、最も早期に米国訪問する大統領が文在寅である。そこで、トランプとの間に、妥協を勝ち取れば、韓国内でも大きなリーダーシップを発揮するであろう。

すこしだらだらと書きすぎたように思う。どうせ、頁あわせのため、削る予定で、あまり気にしなかった。しかし、ほぼ、原稿はぴたりと入っている。まあ、このままでいいか。

二〇一七年六月二十八日

本邦の地磁気曲線上の新事実

高橋　正彦

前回「通信」において、本邦の地磁気変化曲線は、水月湖の湖底堆積の磁気データと太陽活動データとの相関により、精密に年代が特定できる旨を概報した。本論要旨を敢て公開したのは、論点の「起・承・転・結」が極めて明快であるので、その論理的展開の確認が必要と感じた為である。

――この結果、多数から「相関を述べる為には、周期の一致など視覚的訴求がないと理解し難い」との、根強い一般的な感覚が述べられた。実は後々考えると、是は本論の瑕疵ではなく、逆に重要な論点であるのでその理論的背景を整理・説明したい――

●　A　理論的背景の要約　●

①両者には、相関性が観取し難い事実、――是は実は、前者の【全データ】と後者のそれには支配・影響関係がない事を示す。

②但し、両者に特殊な注視点（具体的には急激な変異点の年次）を参照する場合に限り、両者の間に緊密な照合関係が顕現する。

③両者が独立環境にありながら、【特異変移の部分で年次が合致】する場合、両者のこの【変移】には、何ら不正操作は無く、

水月湖の磁気データの年次偏移には、極めて信憑性がある。

――具体的には以下のピークと年次――

1065年、前340年(太陽活動のBC4世紀極小期＝図Aのa')、紀元1325年(太陽活動のヴォルフ極小期＝図Cのm)、1525年(同スプーラー極小期＝図Cのo)

――これ等の年次は確かである。

④ただし、地磁気データと$\Delta^{14}C$は、必ずしも単一の周期で相関していない。(中間に逆位相の周期成分＝第2周期が現れる)

●　B　周期成分の検討　●

音波等の複雑な波形の場合、複雑な成分が潜在しているが、その潜在する副周期成分の、数理的或いは直観的な明認は困難である。

ところが、本件では、特殊なピークを注視すると、潜在周波数が左の通り明らかになる。

(なお年次は、$\Delta^{14}C$変移を基礎とし、図のO-O=基本単位、の間隔は5年である)

①A図左端の^{14}C値の分布は逆正弦カーブであり、－965年のピークを起点、－655年のピークを終点とすると――周期310年

②次に－655年を起点とし、終点を－340年(BC4世紀極小期のピーク)とすると、

――周期＝315年。

③次に、－340年を起点とし、－35年を終点とすると、――周期＝305年となる。

この間14C偏移線とその近似曲線(6次)との交点を、図Aのa.b.c.dとすると、各交点間は175/180/190年となるが、300年周期との関係は不明である。

④B図では^{14}Cに対し、水月データは30年左に戻しているが、前者に良く照合する。又-155/140/440の山を起点として295・300年の周期が得られ、この間の近似曲線にも、これに見合う三山が得られる。

A図では各300年周期と水月の山との増減の状況は順応型であり、図Bのハッチ部分も同様だが、－155年/144年/440年部分では逆相となる。－130～420年の520年に限ると、順応部分の割合は約90%であり

(C図中の太線a~jの計10点で示す)

――大部分で14Cと水月磁気の変移とは

【順応関係にある】――

⑤C図(前150～500年)の順・不順関係は、500~1600年でも同様と解される。

図中の縦太線a~pは【水月の山・谷】の

内で、Incal の直近年に【同様の山・谷(破線で表示)があるもの】を示す。

◆水月 Incal の【山・谷の順応関係を示す太線は 500～1000 年に集中】するが、

◆【全く照合のない不順部分が 1000-1200 と 1400-1500 年に認められる。

● C 双方の周期成分 ●

Incal-水月の変移線には前 965～265 の 1230 年間に亘り、約 300 年周期が見られるが、必ずしも Incal と順応関係ではなく、逆位相を含む場合がある。然し、図ＡＢＣに見る如く順応部の割合(ハッチ・太線部分)の方が多いので、不順部分を捉えて、Incal・水月データに相関なしとは見做し得ない。

(順応・近似の2周期の潜在複合の可能性がある)

双方の長期的な周期及び構成周波数の顕出に関しては、多くの専門家が長年に取り付いており、未だ明快な定説がない現状であるから、その確定はここでは難しい。

但し、少なくとも、太陽活動の極小期における双方の特異ピーク点の、年代的合致は明快であり、極めて重要な意味がある。

● D 水月データ(年次)の信憑性 ●

図版説明(図A)(-BC0年)
水月湖データは原値から10年右移動表示。左端曲線は△140曲線の前965～655年の正弦曲線に近い曲線を示す。—周期310年

図B(BC150から500年▼)
水月湖データはは原値から30年左に移動した場合に、Incalの増減傾向とよく合致する。この間のピーク3種の間は略300年となる。
——(周期300年)

水月湖の堆積磁気データは、堆積土のコアデータであるが、水月湖の年縞(堆積縞は年次を記録する)を計数したものではない。そのデータの詳細を求めるも明示されないので、恐らく厳密な年次情報はない。唯一ある情報は、琵琶湖堆積磁気との対比により、【3m のコア年代は約3千年に相当と推定できる】、事のみである。

この様な曖昧な堆積年に対する信憑性の検証手段として、以下の様な手順を取った。

①3m コアのサンプルは基本 20 ㎜厚の 150 点から成ると推定した(10 年/cm)。

②全標本に【25 年間隔の仮年次】を振る。

③その適否はその【顕著な山谷】が、Incal の山谷の年次とよく適合するかで判定する。

—(10・8 等)は前後年から見た増減度合を示す—

◆前 1075 年(10・8)、前 350 年(6・7)右期間は Incal に対し 10 年乖離があると見られ、この間の年次を右に見る様に 10 年差し引く(新しい年次方向に引き直す)と、

◆前 1065 年(10・8)，前 340 年(6・7)となるが、Incal のピーク=左に合致する。

Incal 前 1065 年(4.4・6.1)，前 340 年(Incal の-340 年の前後 5 年の変量自体は 0.5 前後の些少値であるが、前後 75 年に

渡り18‰前後に大増減しており、このピーク自体は極めて重要な変移点である。）

---なを照合点の密度は **4/350** 年となる。

◆図Bの水月の山・谷年次の直近(5年内)に Incal の山・谷があるもの【太縦線】---

a-80. b-55, c-30, d+20, e30, f95

これに対応する---Incal の山谷の年次

$\bar{a}$-85, $\bar{b}$-60, $\bar{c}$-35, $\bar{d}$+15, $\bar{e}$30, $\bar{f}$95

なを、先の水月磁気の年次は、元の値より30年上流に移動している。データ年次に30年の乖離があると考える。元値の年代は

左記の通りである(元年次に30を差引く)

【a-**50 年**, b-**25**, c-**0**, d+**50**, e**60**, f**125**】

また照合点の密度は **6/200** 年となる。

(なを、水月値を更に5年左に移動した場合、a-f 中の 6/7 は Incal に完璧に照合する)

◆図C(紀元500-1600年)では水月と In-cal 値の間の年次差は無いものとする。

前者の山・谷(太線)で後者との差が僅差の物を挙げると、左の通りである。

a550,b=600,d=700,f=875,g=900,l=950

これに対応する---Incal の山・谷の年次

$\bar{A}$=**550**, $\bar{b}$=595,$\bar{d}$=695, $\bar{f}$=**875**,$\bar{g}$=905,$\bar{l}$=945

又その照合の密度は **6 点/400** 年である。

又、水月ピーク n=1325 , o=1525 年は、Incal ピーク $\bar{n}$=1325 , $\bar{o}$=1530 年によく照合する。なを、水月1530年の元値は3000年の期間幅で見れば、東20度以上に相当し、(琵琶湖磁気値も参照)全く有り得ず間違いであり、前後の趨勢を参考に、図C のPの辺にあると推定する。n-o の山はヴォルフ、シュペーラー極小期の山に相当する。

---(後者極小期は1450-1550年に亙る)

◆水月データの信憑性の結論

水月湖の顕著な山・谷に着目すると、

――図Aではその年次を10年右移動すると、【前1065年】【前340年(前4世紀極小期)】の山は完全に照合し、以降紀元0年までの期間は Incal の増減に照合する。

――図Bでは、前130から紀元325年にかけて、略完璧に山谷が照合する。

――図Cでは同様の照合関係は紀元550年から1000年にかけて存在し、更に紀元1350年(ヴォルフ極小期)・1525年(スプーラー極小期)のピークが照合する。

――依って、現代より前1000年の3000年間における、水月湖残留磁気のデータは$\Delta^{14}C$の間には照合関係が存在し、太陽活動極小期の顕著なピークにおいて、年次が克明に合致する場合が存在する。ここから水月湖残留磁気の25年間隔の年次設定には信憑性があると言えよう。

◆◆◆ 今後への課題 ◆◆◆

近い将来、詳細な水月湖の残留磁気データが明らかになると思われる。ここにおいて紀元0年前後の500年間の実年次に約30年の乖離がある事、紀元1550年のデータに大誤謬のある事の当否が明らかにされるものと期待する。

二〇一七・五・三一